

# N・ホーソーンの『緋文字』とアメリカ文化

時 松 賢 二

## 1. はじめに

文学作品と文化のあいだには多層的かつ有機的な相関作用が存在するというのは疑う余地もない事実であろう。本稿は『緋文字』という作品をできるかぎり作者から切り離し、アメリカ文化との関連を重視しながら作品の意味あるいはテーマを探ろうとする試みである。

『緋文字』の文化的背景を考察している先行研究は数多い。このことは、文学作品と文化のあいだの相関性を考慮すれば至極当然だと思われる。

本稿における「文化」の捉え方は多くの文化的背景の研究とは多少異なるものである。すなわち、本稿ではアメリカ文化を生み出した精神に焦点を合わせている。

アメリカ文化を形成した精神的伝統は、主として frontierism と Christianity であるといえる。本稿では、このようなアメリカ的精神と『緋文字』との関連性を前面に出しながら議論を進めている。

## 2. 役割モデルと強い女性

アメリカ人は“role model”（「役割モデル」）という言葉を好んでつかうようだ。たとえば、クリントン元大統領の大統領としての役割モデルはJ・F・ケネディだった、というふうに。クリントンの大統領としての理想的モデルはケネディだったという意味だ。クリントンはケネディのような大統領になることを望んだのだった。

もちろん、役割モデルはアメリカ人が独占的に使用する用語ではない。

それは人が生まれていらいずっと人間として成長する過程において重要な役割を果たす。子供にとって父親や母親は、いちばん身近な役割モデルだ。父親あるいは母親がよい役割モデルの役割を果たせばその子供は立派に成長するはずだ。

役割モデルは文化の形成と継承に深く関係してないだろうか。人は幼少のときからずっとその国の文化を学習させられる。行動様式や考え方の規範を学習させられる。その規範に相当するのが役割モデルなのである。

現代のアメリカ女性の役割モデルの一つは強い女性である。男性だけでなく女性に対しても同様に強さを求める文化的土壌は日本人にとっては奇妙に思えるかもしれないが、アメリカでは強い女性は男性にとっても女性にとっても魅力であり、理想なのである。

『緋文字』が世に出たのは1850年である。作者ホーソーンは、それよりも約2世紀前のニューイングランドの閉鎖的な清教徒社会で姦淫(adultery)の罪をきせられ、胸に姦淫を表すAの緋文字を始終つけさせられ、世の中の嘲笑と恥辱のさらしものにされながら、それに耐え抜く強い女性を主人公にした。

作品の第13章にはその主人公ヘスター・プリンが強い女性であることがはっきり述べられている。

The letter was the symbol of her calling. Such helpfulness was found in her, — so much power to do, and power to sympathize, — that many people refused to interpret the scarlet A by its original signification. They said that it meant Able; so strong was Hester Prynne, with a woman's strength. (第13章、p.179)<sup>1)</sup>

「その文字はこの天職の象徴であった。実に力になる人で—実行力も同情の力も実に強いので—多くの人々は緋文字Aをもとの意味にとることを拒んだ。その人たちはAble(力ある)という意味だといった。ヘスター・プリンは女性の強さを備えた実に強い人であったからだ。」<sup>2)</sup>

ヘスターは社会から「除け者にされた女」(“the outcast woman”)—13章—であり、追放された女であり、完全に孤独でありながら、しかし彼女の胸のAの緋文字を“Able”の意味だと人々に解釈させるほどの強さを持っていた。

それに反し、牧師のディムズデイルは—彼はヘスターのかつての不倫の相手であり、彼女の愛娘パールの父親でもあるが—姦淫の罪を告白できないでいる弱い人間として描かれている。<sup>3)</sup> 彼は素晴らしい説教をして聴衆の尊敬をあつめる。彼はその罪を隠しもっている、まさにその罪意識のゆえに—まさにその苦悩のゆえに—ますます素晴らしい説教をし、それだけますます尊敬をあつめるのである。が、その尊敬と自分自身の罪の意識との間のギャップ、つまり人々を、聴衆を、欺いているという良心の呵責のために苦しみ、心身とも弱り果てていく。

その心身ともに衰弱していく牧師の治療だと称して牧師と同じ部屋の下に同居しているのが医者チリングワースである。医者はヘスターの夫であるが、その事実を隠しつつ牧師のヘスターとの不義密通の罪を暴きだそうと復讐の鬼と化す。第17章の“The Pastor And His Parishioner”と名づけられた章は小説のクライマックスでもある。ここには昼間でも薄暗い森で牧師と思いがけなく出あうヘスターが—彼女は今でも牧師をはげしく愛しているが—医者は自分のかつての夫であることを牧師に告白する場面が描かれている。衝撃的な事実を知らされた牧師はどうしていいか決めかねてヘスターにこう言う。“Think for me, Hester! Thou art strong. Resolve for me!”（「考えてくれ、ヘスター！あなたは強い。わたしのために決めておくれ！」）ここで牧師は弱い自分とは対照的にヘスターのことをはっきり「強い」と断言している。

ヘスターはアメリカ女性の理想であり、役割モデルでもある強い女性の元祖といえるだろう。作家の想像力というのは、ときとして感嘆に値することがある。作家が自らの想像力で生み出した強い女性像が長い時間を経て文化的伝統としてアメリカの土地に根づいているのである。つまり、一人の作家の想像力が文化的伝統を先取りしているというのは実に驚くべきことではないだろうか。

さきほどのヘスターと牧師との薄暗い森での会話の場面に戻ろう。か弱い牧師が、これから先どうしてよいかわからず、途方にくれて死にたいと弱音をはくと、ヘスターはこう言う。“Heaven would show mercy,” “hadst thou but the strength to take advantage of it.”（「天の神様はお慈悲をたれてくださいましょう」「それを使うだけの強ささえあればですよ」）すぐに牧師はこう答える。“Be thou strong for me!” “Advise me what to do.”（「私

のために強い人でいておくれ！ どうしていいか教えておくれ。』) もはや疑う余地がないであろう。小説ではヘスターの強さが強調されているのは。

アメリカ文化を形成した二大潮流はキリスト教精神とフロンティア精神とってよいだろう。いうまでもなくアメリカの建国の始祖はヨーロッパの宗教的迫害という苦難を耐え忍んで逃れてきた清教徒たちだった。17世紀の初頭に大西洋を渡航すること自体が苦難の旅だった。清教徒たちがメイフラワー号で1620年に新大陸に到着したときは冬も近く、彼らを待ち受けていたのは飢えと寒さという苦難、それに原住民からの攻撃の脅威もあった。ニューイングランドに殖民した以降、荒野のフロンティアを目指して西方に移動したフロンティアへの旅の歴史もまた苦難の連続だった。そうしたアメリカの建国以来の苦難の歴史の結果として醸成したアメリカ文化の伝統は、人々に、男性ばかりではなく女性にも同様に、強い人間であることを強いているのではないだろうか。

作者がヘスターのことを「殉教者」と表現している第5章の一節を引用してみよう。

*She was patient,— a martyr, indeed, — but she forbore to pray for her enemies; lest, in spite of her forgiving aspirations, the words of the blessing should stubbornly twist themselves into a curse. (第5章、p.134)*

「辛抱強く、本当に殉教者ではあった、けれど敵のために祈ることは控えた。許そうという願いは強かったが、祝福の祈りの言葉がかたくなに歪んで呪いになりはしまいかと恐れたからであった。」

「殉教者」という言葉のなかにヘスターの信仰の深さが読みとれる。彼女は神への信仰ゆえに耐えがたい苦難に忍耐し、強くなれるのである。

ヘスターの胸につけている、罪と恥辱のしるしである緋文字は、尼僧が身につけている十字架 (cross) と同じように彼女の強さの源泉である。緋文字のAはまさに十字架の意味を持つのである。

*It was none the less a fact, however, that, in the eyes of the very men who spoke thus, the scarlet letter had the effect of the cross on a nun's bosom. It imparted to the wearer a kind of sacredness, which enabled her to walk securely amid all peril.*

(第13章、p.180)

「とはいえ、こういう噂をする人の眼にさえ緋文字が尼僧の胸にかかる十字架の力をもっていたことはやはり事実だった。これを身につけている人にはある神聖さが備わり、どんな危険な中でも無事に歩くことができた。」

ヘスターの強さの秘密をもう一つ挙げるとすれば、それは彼女が持つフロンティア精神である。彼女は辺境を、「精神の荒野」を歩きまわる。

But Hester Prynne, with a mind of native courage and activity, and for so long a period not merely estranged, but outlawed, from society, had habituated herself to such latitude of speculation as was altogether foreign to the clergyman. She had wandered, without rule or guidance, in a moral wilderness; as vast, as intricate and shadowy, as the untamed forest, amid the gloom of which they were now holding a colloquy that was to decide their fate. Her intellect and heart had their home, as it were, in desert places, where she roamed as freely as the wild Indian in his woods.

.....  
The scarlet letter was her passport into regions where other women dared not tread. Shame, Despair, Solitude ! These had been her teachers,—stern and wild ones,— and they had made her strong, but taught her much amiss. (第18章、pp.202-203)

「しかしヘスター・プリンは、生まれつき勇気と活動力を備え、長い間社会から遠ざかっていたばかりか追放の身の上だったので、牧師にはまったく異質な思考をすることに慣れていて、基準も導きもなく、精神の荒野をさまよっていたのだ、二人が自分たちの運命を決めるような相談をしている薄暗い原始林と同じように、果てもなく入りこんで蔭の多い精神の荒野を。彼女の知性も感情も、いわば荒野を住み家とし、野蛮なインディアンが自分の森を歩き廻るように自由にそこを歩き廻っていた。」

.....  
緋文字は他の女性が歩む勇気もない場所へはいる通行証であった。恥辱、絶望、孤独！こういうものが彼女の厳しく烈しい教師となり、彼女を強くしたがまちがった教えも多かったのだ。」

ここに書かれているのは、ヘスターはまさにアメリカのフロンティアイズムの体現者であるということである。彼女の精神はアメリカの荒野の大自然そのものだ。そしてまた上記の引用のなかにあるように、彼女の精神の荒野が彼女を強くしたのであった。

こうしてみると、アメリカ文化はジェンダーの差異、すなわち男女の性差がないことを理想としているように思えてならない。フロンティア精神をたくましく身につけているヘスターは男と同じくらい、あるいは男以上に強い女として描かれている。

ここで注意しなければならないのは、作者ホーソーンは17世紀のニューイングランドの初期清教徒社会で姦淫の罪を犯した実際の女性をモデルにしているものの、主人公のヘスターは作者の想像力の産物であるということである。当時の実際の家庭の一般的な既婚女性は夫に従順であるのが理想とされ、「信心深い女性でキリスト教的な秩序をよく守りよき妻としてふるまう女性がニューイングランドでの理想像だったのである。」<sup>4)</sup>

しかし、現代のアメリカ文化は何世紀もの時間を経て徐々に形成されたものである。すでに述べたように、ある作家の卓越した想像力が時間を超越してアメリカ文化の伝統を先取りしているとしても何の不思議でもないのである。

### 3. 自由とアメリカ文化

アメリカ文化の理念を最も端的に表している言葉は「自由」であろう。自由こそは一般的アメリカ人が、あるべき理念として共有しているものである。この自由の実現にキリスト教精神とフロンティア精神が寄与しているのである。

キリスト教の教義あるいは宇宙観は自由を鼓舞している。<sup>5)</sup> このことにかんする実証的考察はここでは控えさせていただくが、実際、清教徒たちがメイフラワー号で新大陸に渡った最大の理由は宗教的(あるいは市民的)自由を求めていたからにはほかならない。

ニューイングランドの初期清教徒社会においては宗教と法が同じである、いわば神権政治の統治が行われていたせいもあり、今日的な意味での自由は存在しなかった。しかし『緋文字』には後述するように、自由の萌

芽の息吹を感じさせる叙述が散見される。

ヘスターは生来的にというか、潜在的に自由な女性である。彼女は閉鎖的な清教徒社会で姦淫の罪を犯す。彼女の生涯は基本的にはこの罪の償いに終始する。そして、この作品の最大のテーマは「罪の償い」といってもいいだろう。作品にはヘスターが罪のしるしである緋文字を（ほんの一時的是ではあるが）かなぐり捨てる場面がある。かつての愛人であるデイズデイル牧師とヨーロッパへの駆け落ちを決意する場面である。彼女がその恥辱のしるしをかなぐり捨てるやいなや彼女はそれまで感じることもなかった「自由」を感じる。

The stigma gone, Hester heaved a long, deep sigh, in which the burden of shame and anguish departed from her spirit. Oh exquisite relief! She had not known the weight, until she felt the freedom! (第18章、p.204)

「恥辱のしるしがなくなると、ヘスターは長く深い吐息をついた、すると恥や苦みの重荷が魂から消えていくのだった。ああ何という安らかな気持ちだろう！この自由を感じるまではその重圧に気づかなかったのだ！」

彼女が自由を感じるとすぐに、それまで暗かったあたりの森にさんさんと日光が輝く。

All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. (第18章、p.204)

「突然、天が急にほほえんだかと思うように、ぱっと日光がさしてきて、暗い森に光があふれ、緑色の木の葉を残らず元気づけ、黄色い落葉を金色に変えて物さびた樹木の灰色の幹を下まで輝かせた。」

この日光は、自由という名の希望を象徴しているのではないだろうか。17世紀以降のアメリカは世俗化へと向かう。<sup>6)</sup> 自由の勝利という日光を目指して。<sup>7)</sup>

ヘスターの小さな愛娘パールを連れての牧師との駆け落ちの意図は結

局、牧師の死によって実現されないままで終わる。その後、ヘスターはパールを連れてヨーロッパのどこかに姿を消すのであるが、のちに一人だけで元のニューイングランドの粗末な小屋の住まいに戻る。そこで一人ひっそりと緋文字をつけて、罪の償いをしながら一生を終えるのである。

このようにヘスターの自由への渴望は彼女の潜在意識に閉じ込められたままで終わる。ヘスターに自由を認めさせなかったものは、「時代」である。人はみな時代の産物である。ニューイングランドの17世紀という時代は彼女に自由を許さなかったのである。

ヘスターの自由への願望は彼女の「唯一の宝」である愛娘、小さなパールに託されているといえないだろうか。小説では罪の子どもであるパールの描写に少なからずのページが割かれている。パールは小説を読み解く鍵である。パールはヘスターの潜在意識での自由への願望を具現している人物であると解釈される。事実、小説においては自由の豊饒を暗示していると思われる日光がパールの上にさんさんと輝いている場面を何度か見つけることができる。<sup>8)</sup>

荒野のフロンティアもまたアメリカ的自由を育成する恰好の場であった。それは「旧来のヨーロッパ的制度のようなものに縛られず、自由に自身の生をまっとうできる場でもあった」からだ。<sup>9)</sup>

アメリカにおいて1840年から60年にかけての時代はフロンティアへの熱狂が最高潮に達していた時代だった。<sup>10)</sup> その時代の真ただ中を生き、時代の空気を一身に浴びていたホーソーンのこの『緋文字』(1850)は、他の同時代を代表する作家の作品と同様、荒野のフロンティアへの礼賛が随所に見てとれる。

すでに述べたようにヘスターの精神もフロンティア人そのものであった。胸につけざるを得なかった緋文字のせいで彼女は周囲から白眼視され、疎外された。彼女のその精神的状況はアメリカの辺境の荒野の荒涼さを想起させる。その荒野は彼女の精神的状況のメタファとなっている。

一方、精神の荒野は彼女を自由にする。

For years past she had looked from this estranged point of view at human institutions, and whatever priests or legislators had established; criticising all with hardly more reverence than the Indian would feel for the clerical band, the judicial



robe, the pillory, the gallows, the fireside, or the church. The tendency of her fate and fortunes had been to set her free. (第18章、p.202)

「彼女は何年もの間、人間のおきてや、牧師や立法者が設けたものすべて、この社会から離れた見方で眺めてきた。そしてインディアンが牧師の白い垂れ襟や法服、さらし台、断頭台、炉辺や教会などを見て感ずるぐらいの尊敬しかもたずに一切のものを彼女は批判していた。彼女の運命や運勢は彼女を自由にする方向へ向かっていた。」

ヘスターの幼い愛娘パールにも“wild”（「野生的」）という形容詞が何度もつけられているのは興味深い事実である。“wild”はフロンティアの荒野を示唆する。作品ではまたパールのことを繰り返し「妖精」だと呼んでいる。彼女は荒野の森の自由奔放な、美しい妖精なのである。パールはまさに野生の子どもである。<sup>11)</sup> 野生的なインディアンよりも野生的であることが強調されている。

She ran and looked the wild Indian in the face; and he grew conscious of a nature wilder than his own. (第22章、p229)

「パールは走りよって野性的なインディアンをまともに眺めると、インディアンの方では自分より野生的なものがいるのに気づくのだった。」

パールは母親ヘスターのフロンティアの野生と自由への夢を受け継いでいるといえる。17世紀の清教徒社会における罪の子供であるパールは、19世紀末まで続く、西へ、西へと移動するフロンティア運動の歴史を経て、また20世紀初頭の婦人参政権獲得をふくむ女性の地位向上の時代を経て、そしてまた1960年代の女性解放運動の時代を経て、21世紀現代の自由なアメリカ女性へと継承されるのである。

#### 4. おわりに

以上、本論ではヘスターに焦点を当てながら議論を進めた。これは当然のことだと思われる。なぜなら、小説の主人公はヘスター・プリンだからである。

先行研究においては、その主人公をめぐって大きく二つに議論が分かれる。一つはヘスターは自由を愛する、現代風の新しいタイプの女性だとする見方である。この見方を仮に (a) と呼ぶことにしよう。もう一つは、D. Abel が論証しているようにヘスターを暗鬱な罪人とする見方である。これを (b) と呼ぶことにする。<sup>12)</sup>

本稿は (a) と (b) の中間の立場をとっている。より正確に言えば (a) も (b) も両方とも正しいとする立場である。

本論で私はヘスターは自由な女性であるとした。ただし、正確には「潜在的に自由な女性である」と書いた。その潜在性が重要なのである。ヘスターの意識上での行動様式は (b) に属する。しかしながら、彼女の潜在意識を支配しているのは (a) である。

先行研究においてヘスターの潜在意識に着目している研究は見当たらない。本稿に新しい見方があるとするれば、それはヘスターの潜在意識に着眼している点であろう。ヘスターの潜在意識での自由への願望が彼女の愛娘パールに引き継がれ、それがさらに現代にも脈々と継承されている、というのが本稿の眼目である。

## 注

1. 原文の引用に付しているページ数は、*The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne* (New York: The Modern Library, 1965) のページ数を示す。
2. 引用原文の日本語訳は鈴木重吉『緋文字』（新潮文庫）を使用させていただいた。分かりやすくするために文章を変えさせてもらった箇所もある。
3. R.Stewart の言葉を借りると、“She [Hester] was indeed courageous, and strong. Arthur [Dimmesdale] , in comparison, has seemed pitifully weak, but justice, I think, has not been done to Arthur. Arthur’s situation was much more difficult than Hester’s.” Randall Stewart ‘Puritan Humanism vs. Romantic Naturalism’ in *Nathaniel Hawthorne The Scarlet Letter*, ed. Sculley Bradley and two others (New York: Norton, 1962), p.348. 本稿ではヘスターは強く、ディムズデル牧師は弱い人間であると単純に割り切って議論を進めている。そのこと自体は事実で、間違いないのだが、小説においては R.Stewart が指摘しているように実情はそれほど単純で明快なものでもない。
4. 荒木純子「キリスト教共同体のなかの女性」『アメリカ・ジェンダー史研究

入門』有賀夏紀・小檜山ルイ（編）青木書店、2010年、36ページ。

5. 『アメリカ 自由の物語』（上）岩波書店、2010年（Eric Foner, *The Story of American Freedom*, translated by Ryo Yokoyama and three others), 2-4ページ。
6. 「世俗化」といってもアメリカは今でも世界で最も宗教的な国の一つだと考えられている。
7. すでに述べたようにキリスト教の教義と自由は矛盾しない。
8. たとえば、“Hester smiled, and again called to Pearl, who was visible, at some distance, as the minister had described her, like a bright-apparelled vision, in a sunbeam, which fell down upon her through an arch of boughs. The ray quivered to and fro, making her figure dim or distinct...”（第18章）あるいは “It was strange, the way in which Pearl stood, looking so steadfastly at them through the dim medium of the forest-gloom; herself, meanwhile, all glorified with a ray of sunshine, that was attracted thitherward as by a certain sympathy.”（第19章）
9. 風丸良彦『アメリカ文化の問題史的考察』（若草書房、2011年）、23ページ。
10. 「1840年代から60年代にかけて、アメリカ人の西への関心は熱狂的だった」。亀井俊介（編）『アメリカ文化史入門』（昭和堂、2010年）、59ページ。
11. この見解に異論をはさむホーソン研究者はいないだろう。たとえば、R. H. Fogleはこう言っている。“Pearl herself is a creature of nature, most at home in the wild forest.” Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman: University of Oklahoma Press, 1964), p.136.
12. Darrel Abel, *The Moral Picturesque Studies in Hawthorne's Fiction* (West Lafayette Indiana: Purdue University press, 1988), pp.180-189.